広告　企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

人を笑顔にする、ガラスの光り。柔らかく、美しい灯り。

小路口 力恵　富山県／ガラス作家

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第1回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

◇　◇　◇

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。富山県選出の匠、ガラス作家・小路口力恵さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

エリア・コンサルティングにて

1月18日、プレゼンテーションにて

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

富山の小路口さん ガラスを照明器具に

「ガラスの街とやま」として、ガラス作家育成の学校や工房を有する富山県富山市。この街で、ガラス作家として活動する小路口さんは、「自分らしさ」と「新しさ」を胸に、板ガラスを素材にした照明器具を完成させた。それが「MIAKARI・kasane」と「MIAKARI・ren」だ。

「kasane」は、板ガラスの表面を削ると同時に先端を削り飛ばすことで、照明が点灯した際、光が先端から強く放たれ、それ以外の部分では光が留まる。削った板ガラスを何枚も積み重ね、一枚一枚が自由に回転することで、光に動きが生まれ、躍動する。

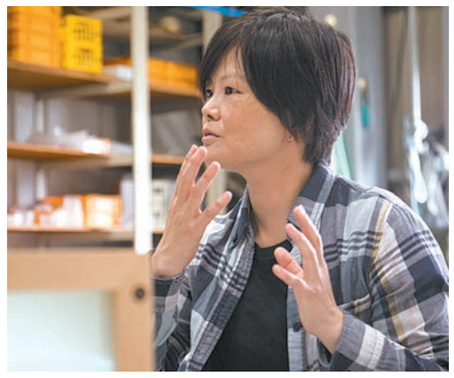
一方の「ren」は、まるで絵画のような趣き。ガラスの効果は「kasane」のそれと同様だが、形の組み合わせの妙により、重なり合う部分が、幻想的な光を生み出している。

製作にあたり「ガラスは冷たい、硬いという印象が強い。でも、私はガラスの温かさや柔らかさ、その優しさを表現したい」と語る。これまで小路口さんが製作してきた作品群と同様の理念が、今回の「MIAKARI」の根底にも流れている。「自分らしさ」である。

「新しさ」は、ガラス以外の異素材を組み合わせたこと。「今まではガラスしか扱ってきませんでしたが、今回、フレームには木を、光源にはLEDを使って仕上げた。扱い慣れない素材に苦心したが、それが新鮮な経験で心から楽しかった」と朗らかに笑う。

ガラス作家としてこれまで培ってきた技術力と、新たな挑戦によって生まれた「MIAKARI」。その名前には、特別な灯り、美しい灯りとの思いが込められている。

作品をプレゼンする小路口さん


工房にて、地元への思いを語る小路口さん

完成プロダクト「MIAKARI-kasane」（左）、「MIAKARI-ren」（右）

富山の地で光る、創作の灯火

今回のプロジェクトではサポートメンバーからさまざまな意見をもらい、多くの気づきを得たと小路口さんは語る。「MIAKARI」の試作を繰り返すなかで「もう少し木枠を細くした方が良い」とサポートメンバーから助言。その時、「試作品が出来上がったことだけで安心していた自分に気付いた」と話す。慣れない素材である木材などを使い、ガラス部分と合わせるという初めての経験に焦り、まずはカタチの完成を急いでいたが「あのひと言で我に返った。一旦、冷静になってもう一度、ガラスと木のバランスを見直し、プロダクトの質を向上させる契機になった」。

さらに「LEDの光源は、寒色以外に暖色もあった方が良い」との言葉から、試行錯誤を経て、スイッチひとつで調光、調色ができるようにした。そのため「MIAKARI・ren」は置く場所や時間、使い手の気分に合わせた光の色合いが楽しめる。

「私はガラス本来の青白い光が好き」と話す小路口さんは、ガラスの「手触り」に魅せられ、この世界に入った。「ヤスリがけしたガラスの触感が手に伝わった時、ガラスでカタチあるものを作りたい」との思いに駆られたという。そして「ガラスの持つ雰囲気で、人が笑顔になってくれるものを作りたい。その笑顔を見ることが私の幸せ」との想いを胸に創作活動を続けている。だからこそ生まれる、優しく温もりにあふれる手触り。繊細に削られたガラスを通して、柔らかな光を放つ「MIAKARI」は、彼女の心そのものを表しているかのようだ。

創作活動はこれからも富山の地で続く。「これからもずっと富山で活動を続け、多くのガラス作品を生み出していきたい」。そして県外や海外の展示会で「富山はガラスが有名」と出会った人たちに伝え、PRすることで「少しでも地元の貢献になれば」と小路口さん。

最後にこのプロジェクトについて「他県の匠と交流できたことが刺激になり、一番の財産。ガラス以外の素材を使った今回の挑戦は、今後の自分の可能性を広げることになると思う。そして、レクサス富山の方々など多くの人に応援してもらい、感謝の気持ちでいっぱい」と優しい笑顔を輝かせる。

創作の灯火はさらに力強く、さらに美しい光を放つ。

プレゼンテーション会場にて

小路口さんの作業風景

工房周辺の風景

小路口 力恵
富山県／ガラス作家

1994年富山美術工芸専門学校デザイン学科卒業、翌年デザイン学科研究課程修了。1998年富山ガラス造形研究所造形科卒業後、2000年研究科修了。2000年から富山ガラス工房所属。2003年、あさひふるさと創造社なないろKAN硝子工房所属。2005年に小路口屋硝子工房を設立。「富山市美術展」工芸部門 市展大賞や第5回「酒の器展」金賞などを受賞。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT